

若者言葉「～とか」の強調用法について

洞澤 伸・奥村 佳奈

(2015 年 6 月 30 日受理)

On the Emphatic Use of “Toka” in Young People's Slang

Shin HORASAWA and Kana OKUMURA

1. 問題提起

本稿の目的は、若者言葉「～とか」には強調用法があること、および、それが従来の用法の拡張により実現していることを明らかにすることである。

これまで若者たちが日常的に使用する「～とか」は、ぼかし言葉^{*1)}、すなわち、そのぼかし用法としての側面ばかりが注目されて論じられてきた^{*2)}。それは、物事を断定しない「ぼかす言い方」または「自信のない言い方」とされる用法である。しかし、たとえば、次の(1)の使用例が示すように、若者言葉「～とか」には強調表現としての用法もある。

(1) 「銅メダルとかとっちゃって。」(天野 2001)

この(1)は、シドニーオリンピック(2000 年開催の夏季オリンピック)で女子テコンドー67 キロ級の銅メダリスト・岡本依子選手がテレビ中継のマイクが向けられたときに発した言葉である。天野(2001)では、このような「～とか」には“卓立的提示”(以下、本稿では“強調提示”とする)という意味機能が認められ、それは「～とか」の従来の用法が拡張されたものであることが示されている。岡本選手が獲得したのは「銅メダル」だけであり、ある集合の要素を並列的に例示する従来の用法(“一部例示”)ではない。また、これは獲得した「銅メダル」に確信が持てず、その存在の断定を回避するぼかし用法(“断定回避”)でもない。この(1)「銅メダルとか」は、「こともあろうに銅メダルを」「他の何ものでもない銅メダルを」または「なんと銅メダルを」という意味である。つまり、この「～とか」は「銅メダル」を強調して示す用法なのである^{*3)}。(天野 2001)

本研究では、「～とか」の(1)のような強調用法(“強調提示”)が、その従来の用法(“一部例示”)を基本的意味として、それが拡張された用法であることを改めて明らかにしようと思う。すなわち、それは上記の天野(2001)の指摘を例証することになる。その際、アンケート調査により収

集した若者たちの実際の「～とか」の使用例を分析の対象として、次の(イ)(ロ)(ハ)の3つの問題を考察する。

- (イ) 「～とか」の使用と言い方に対する感じ方
- (ロ) 「～とか」の使用場面と表現機能
- (ハ) 「～とか」の意味機能の拡張と使用の広がり

問題(イ)では、実際にどの程度の若者たちが「～とか」を使用するのか、また、その表現についてどのように感じるのかを探る。問題(ロ)では、「～とか」は実際にどのような場面で使用されるのか、および、その表現機能について考察する。そして、問題(ハ)では新しい「～とか」の用法は、その基本的意味が拡張されて実現していることを示す。また、その使用の広がりに見られる特徴についても考察する。それは「～とか」の多義性を探ることになる。以上、本稿では若者言葉「～とか」について、これら(イ)(ロ)(ハ)の3つの問題を考察する。なお、これまで「～とか」の強調用法について考察が行われた研究は数少ない。また、これらの問題について、若者たちの「～とか」の実際の使用例を分析の対象とする研究はまだ行われていない。

しかしながら、寺村(1991)、遠藤・谷部(1995)、丸山(1996)、砂川(2000)、中俣(2008)、劉(2011)などによれば、「～とか」の用法は実に多様である。そのため、本研究では①従来の用法(“一部例示”)、②ぼかし用法(“断定回避”)、そして、③強調用法(“強調提示”)の3つに限定して、各用法を対照させながら論考する。

ここで、本研究の分析対象となる「～とか」の用法を確認しておきたい。まず、①従来の用法(“一部例示”)の事例として、たとえば、次の(2)がある。この(2)は『日本語文型辞典』(くろしお出版 2000)における「～とか」の例文である。そして、②ぼかし用法(“断定回避”)と③強調用法(“強調提示”)のそれぞれの事例として、たとえば、次の(3)(4)がある。これら(3)(4)は、以下で示すアンケート調査において収集された若者たちによる「～とか」の実際の使用例である。各使用例のあとにある記号は、回答者の性別と生年を表す。

- (2) 「私は、ケーキとか和菓子とかの甘いものは、あまり好きではありません。」
 (『日本語文型辞典』) ……①従来の用法(“一部例示”)【基本的意味】
- (3) (友達と夕食を食べに行くことになり、何が食べたいかを聞かれたときに)
 「ハンバーグとかがいいな。」(F,'96) ……②ぼかし用法(“断定回避”)
- (4) (夜、忘れていた別の課題を見つけて)「今から新しい課題とかやっつけられないわ。」(M,'95) ……③強調用法(“強調提示”)

①従来の用法(“一部例示”)とは、ある集合の要素2つ以上を並列的に例示する用法である。この(2)の場合、甘い食べ物が嫌いな話者が、その例として「ケーキ」と「和菓子」をあげてい

る。つまり、ある集合(この場合は「甘い食べ物」)の要素がその例として提示されているのである。この用法には、ある集合の要素の一部を並列的に例示することにより、その集合全体を推定させる、または、他の要素の存在を暗示させる機能がある。一般的に、この用法の“一部例示”は「～とか」の基本的意味とされている。次に、②**ぼかし用法(“断定回避”)**とは、物事を断定しない曖昧な言い方をする用法である。それは、「ぼかす言い方」または「自信のない言い方」とも形容される。この(3)は、友達が何を食べたいのか分からないので、「ハンバーグ」と決めつけてしまうと申し訳ないと話者が考えるような場面での発話である。「～とか」を付けることで、食べたいものを曖昧にして、それを断定することが回避されている。そこには話者による「聞き手への配慮」がある。そして、③**強調用法(“強調提示”)**とは、特定の事柄を強調して提示する用法である。この(4)は、夜遅くて疲れているときに忘れていた「新しい課題」を見つけて、話者がショックを受けているような場面での使用例である。この「新しい課題」は、ある集合の要素として“一部例示”されているのではない。また、その存在が不確かであるために“断定回避”されているわけでもない。この(4)は、「これから別の新しい課題なんてやりたくない」ということを表現する話者の嘆きの発話である。「～とか」により、「新しい課題」は強調して提示されている。そこには、課題に対する話者の否定的な気持ちが表現されている。

本研究では、以上①～③の「～とか」の3つの用法を考察の対象とする。そして、上記の(イ)(ロ)(ハ)の3つの問題について、特に②ぼかし用法(“断定回避”)と③強調用法(“強調提示”)の2つの用法の分析を中心に行うことにする。それは、①従来の用法(“一部例示”)は本来的な用法であるためである。

2. アンケート調査

本稿では、岐阜大学の学生に対して2012年、13年、14年の全3回に渡って行われた「～とか」の使用についてのアンケート調査の結果を分析の対象とする。このアンケート調査では、被験者に対して、まず①従来の用法(“一部例示”)を説明した上で、②ぼかし用法(“断定回避”)と③強調用法(“強調提示”)について、次の(5)1)～3)に示すような内容(概略)の質問をした。

(5) アンケート調査の内容(概略)

- 1) 「～とか」の使用の有無
- 2) 「～とか」の使用に対する感じ方
- 3) 「～とか」の使用例とその使用理由

このアンケート調査では、合計342人(男性161人、女性180人、性別不明1人)から回答を得た。また、その平均年齢は19.7歳であった。なお、この(5)アンケート調査1)～3)の具体的な質問については、以下の分析において示す。

3. 分析

3.1. 「～とか」の使用と言い方に対する感じ方

ここでは、②ぼかし用法(“断定回避”)と③強調用法(“強調提示”)の「～とか」について、実際にどの程度の若者たちがそれを使用するのかを調べる。また、その言い方についてどのように感じるのかを探る。

3.1.1. ぼかし用法の「～とか」について

まず、②ぼかし用法(“断定回避”)の「～とか」の使用の有無とその言い方に対する感じ方を調べるために、次の(6)のような例を用いた。

(6) (家を訪ねてきた友達に)「コーヒーとか飲む？」

この(6)の話者は、家を訪ねてきた友人に何か飲み物を勧めるとき、「～とか」を使用して「コーヒー」と決めつけないようにしている。これは、他にも選択肢があることを暗示させる“断定回避”の一例である。この使用例に対して、(5)1)「あなたはこのような表現を使いますか？」という質問をした。その結果は、「はい」と答えた人は291人(85.1%)、「いいえ」と答えた人は51人(14.9%)であった。このことから、アンケートの調査対象となった若者たちの約8割以上が②ぼかし用法(“断定回避”)の「～とか」を使用することが分かった。

次に、使用の有無と合せて、この言い方が気になるかどうかを調べるために、(5)2)「あなたはこのような言い方についてどう考えますか？」という質問をした。その際、次の(7)の選択肢 1)～6)の中から一つを選択してもらった^{*4)}。その結果は、(7)に示した数値の通りである。

(7) ②ぼかし用法の「～とか」の使用の有無と気になるかどうか	(n=342)
1) 自分も使うし、他人が言うのも気にならない	284人 (83.0%)
2) 自分は使わないが、他人が言うのは気にならない	38人 (11.1%)
3) 自分は使うが、他人が言うのは気になる	3人 (0.9%)
4) 自分は使わないし、他人が言うのも気になる	10人 (2.9%)
5) どれに近いとも言えない	6人 (1.8%)
6) 分からない	1人 (0.3%)

この(7)に示したように、1)「自分も使うし、他人が言うのも気にならない」と答えた人は284人(83.0%)、2)「自分は使わないが、他人が言うのは気にならない」と答えた人は38人(11.1%)、3)「自分は使うが、他人が言うのは気になる」と答えた人は3人(0.9%)、4)「自分は使わないし、他人が言うのも気になる」と答えた人は10人(2.9%)、5)「どれに近いとも言えない」と答えた人は6人(1.8%)、6)「分からない」と答えた人は1人(0.3%)であった。

このように、この用法の使用率は 85.1%であり、使用の有無にかかわらず、その言い方が「気にならない」と考える人が 94.1% (= (7)1)83.0% + 2)11.1%)であった。これらのことから、この②ぼかし用法(“断定回避”)は、若者たちの間に定着している表現であることが分かる。

3.1.2. 強調用法の「～とか」について

次に、③強調用法(“強調提示”)の「～とか」の使用の有無とその言い方に対する感じ方を調べるために、次の(8)のような例を用いた。

(8) (勉強中の友人に対して)「こんな遅い時間まで勉強できるとかすごいね。」

この(8)の話者は、夜遅い時間まで勉強をする友人に驚き、「～とか」を使用してその事態を強調している。これは、物事を強調して表現する“強調提示”の一例である。この使用例に対して、(5)1)「あなたはこのような表現を使いますか?」という質問をした。その結果は、「はい」と答えた人は 220 人(64.3%)、「いいえ」と答えた人は 121 人(35.4%)、無回答が1人(0.3%)であった。このことから、アンケートの調査対象となった若者たちの約6割程度が③強調用法(“強調提示”)の「～とか」を使用することが分かった。

次に、使用の有無と合せて、この言い方が気になるかどうかを調べるために、(5)2)「あなたはこのような言い方についてどう考えますか?」という質問をした。その際、次の(9)の選択肢 1)～6)の中から一つを選択してもらった。その結果は、(9)に示した数値の通りである。

(9) ③強調用法の「～とか」の使用の有無と気になるかどうか	(n=342)
1) 自分も使うし、他人が言うのも気にならない	205 人 (59.9%)
2) 自分は使わないが、他人が言うのは気にならない	90 人 (26.3%)
3) 自分は使うが、他人が言うのは気になる	6 人 (1.8%)
4) 自分は使わないし、他人が言うのも気になる	23 人 (6.7%)
5) どれに近いとも言えない	11 人 (3.2%)
6) 分からない	1 人 (0.3%)

この(9)に示したように、1)「自分も使うし、他人が言うのも気にならない」と答えた人は 205 人(59.9%)、2)「自分は使わないが、他人が言うのは気にならない」と答えた人は 90 人(26.3%)、3)「自分は使うが、他人が言うのは気になる」と答えた人は 6 人(1.8%)、4)「自分は使わないし、他人が言うのも気になる」と答えた人は 23 人(6.7%)、5)「どれに近いとも言えない」と答えた人は 11 人(3.2%)、6)「分からない」と答えた人は 1 人(0.3%)であった。なお、無回答が6人(1.8%)いた。

このように、この用法の使用率は64.3%であり、使用の有無にかかわらず、その言い方が「気にならない」と考える人が86.2%(=(9)1)59.9%+2)26.3%)であった。これらのことから、この③強調用法(“強調提示”)は、②ぼかし用法(“断定回避”)ほどではないが、若者たちの間にその使用が広がっている表現であることが分かる。

他方、使用の有無にかかわらず、その言い方が「気になる」と考える人が②ぼかし用法(“断定回避”)3.8%(=(7)3)0.9%+4)2.9%)、③強調用法(“強調提示”)8.5%(=(9)3)1.8%+4)6.7%)の割合で存在する。両者②③の使用率、および、その言い方が「気にならない」「気になる」の割合をまとめると、次の表(10)のようになる。

(10) 「～とか」の使用率などの相違 (n=342) (%)

	使用率	「気にならない」	「気になる」
②ぼかし用法	85.1	94.1	3.8
③強調用法	64.3	86.2	8.5

この表(10)に示された「～とか」の②ぼかし用法(“断定回避”)と③強調用法(“強調提示”)の使用率などの数値の相違をその①従来用法(“一部例示”)との関係において捉えると、とても興味深いことが分かる。このことについては、3.3.において「～とか」の意味機能の拡張と使用の広がりという観点から後述する。

3.2. 「～とか」の使用場面と表現機能

ここでは、②ぼかし用法(“断定回避”)と③強調用法(“強調提示”)の「～とか」について、それぞれの使用場面と表現機能について考察する。

実際の使用場面と表現機能を調べるため、アンケート調査では用法②と③について、(5)3「あなたが使う使用例をあげてください。そして、どうしてそのような「～とか」を使用するのかを説明してみてください。」といった質問をして、自由記述形式で回答してもらった。「～とか」の使用場面と表現機能は多様であり、現研究段階ではそれらのすべてを網羅的に説明することはできない。以下において示す使用例とその解説(アンケート調査の自由記述にもとづく説明)は、各用法の代表的なものに限定する。

3.2.1. ぼかし用法の「～とか」について

②ぼかし用法(“断定回避”)の使用例として、たとえば、次の(11)～(20)のように相手に何かを提案する場面で使用されるものがある。

(11) (連休中の遊びに誘うとき友達に)「カラオケとかに行かん？」(M, '94)

(12) (遊ぶ約束をしてあった友達と具体的に決めてなかったことを決めると

- き)「この前遊ぶって言ってたじゃん?それ明日とかどう?」(M,'92)
- (13) (友達と別の友達へのプレゼントを相談しているときに)「マフラーとかよくない?」(F,'95)
- (14) (友達と遊ぶ前日に場所を決めるとき)「明日はこの前できたカフェでおしゃべりとかでいい?」(F,'93)
- (15) (友達と他の友達へのプレゼントを買いに行ったとき)「これとかいいんじゃない?」(F,'94)
- (16) (暇で友達を誘ってどこかへ遊びに行きたいとき)「今から海とかに行つて遊ばん?」(M,'96)
- (17) (友達をご飯に誘うときに)「ガストとか行かない?」(F,'95)
- (18) (大学の友達と午後からやるスポーツを話し合っているとき)「バスケとかいいんじゃない?」(M,'95)
- (19) (中学に入学した妹が何部に入部しようか迷っているとき)「テニス部とかは?」(F,'94)
- (20) (ランチをしに行くとき、どこがいいか聞くため友達に)「ランチはイタリアンとかでいい?どうする?」(F,'93)

これら(11)～(20)の「～とか」は、いずれも相手に何かを提案する場面で使用されている。たとえば、(11)では、友人から断られたときにボーリングやテニスなどの別の遊びに誘いやすくなるように、カラオケに限定せずに誘う気持ちで「カラオケとか」と表現されている。(12)では、急な話に対して相手が断りやすいように「明日とか」と表現して遊びに行くことを提案している。これには「他の日でも良いよ」という暗示がある。(13)では、「マフラーとか」と表現することにより、マフラーに限定するのではなく、プレゼントを選ぶときの一つの選択肢として提案している。(14)では、友達が自分の希望を言いやすいように「～とか」を用いてカフェでお喋りすることを提案している。そこには、別のことをしたいかも知れない友達への配慮がある。その他、(15)～(20)も同様に説明することができる。

また、②ぼかし用法(“断定回避”)には、たとえば、次の(21)～(30)のように相手に何かの問い合わせをする場面で表現を柔らかくするために使用されるものがある。

- (21) (旅行中にホテルで友達に)「トランプとか持ってない?」(F,'95)
- (22) (メモを取りたいが手元に筆記用具がないとき友達に)「ボールペンとかもってない?」(F,'94)
- (23) (気になっている異性と話しているときに、その人に対して)「〇〇君は、彼女とかいるの?」(F,'95)
- (24) (サークル活動で車で移動中、先輩に話題をふるときに)「〇〇先輩は、

趣味とかありますか？」(F,'95)

(25) (大学で友達にランチについて)「今日のお昼とかどうする？」(F,'96)

(26) (友達に対して兄弟がいるか聞くときに)「妹とかいる？」(F,'95)

(27) (飲食店で紙ナプキンが欲しいとき)「紙ナプキンとかってありますか？」
(F,'95)

(28) (仕事を任されたものの、やり方がわからないときに)「気を付けることとかありますか？」(M,'93)

(29) (デパートへ服を買いに行ったとき店員に)「この服のSサイズとかってありますか？」(M,'96)

(30) (友人の家で、鼻をかむためにティッシュが欲しいとき友達に)「ティッシュとかってある？」(F,'95)

これら(21)～(30)の「～とか」は相手に何かの問い合わせをする場面で使用されている。たとえば、(21)では、特にトランプにこだわっているわけではなく、旅行先でみんなと一緒に遊べるゲームが何かあれば良いと思って「～とか」が使用されている。(22)では、「ボールペン」と決めつけてしまうと、それが無い場合、相手は困ることになる。そのため、「～とか」を使用して筆記用具の選択肢を広げている。(23)では、本当は彼女がいるかどうか率直に聞きたいところだが、それはとても気恥ずかしい。また、「相手に彼女がいたらどうしよう」という不安から、聞くのをためらい、言葉を濁すために「～とか」が使用されている。(24)では、もし趣味が無かった場合、相手は気まずい思いをするかも知れない。そのための配慮から、「～とか」が使用されている。その他、(25)～(30)も同様に説明することができる。

その他、②ぼかし用法(“断定回避”)は、たとえば、次の(31)(32)のように相手からの問い合わせに対する返答の中で使用されることもある。

(31) (買い物に行って友人に何色が似合うか聞かれたときにその返事として)「ピンクとかがいいんじゃない？」(F,'95)

(32) (親に何が食べたいか聞かれたとき)「ラーメンとかでいいよ。」(F,'91)

(31)は、友人の好みの色が分からなかったり、自分のセンスに自信がないときの発話である。「～とか」を使用することにより、決して強制せず、他にも色の選択肢があるようにして決断は相手に委ねている。(32)では、もし断定するとラーメン以外は食べたくないと思われるかも知れない。また、そのときの親の意向は分からない。さらには、家にラーメンの買い置きがないかも知れない。そのような配慮から「～とか」が使用されている。

以上、決して網羅的ではないが、②ぼかし用法(“断定回避”)の代表的な使用例を具体的に考察した。その結果、「～とか」は相手に何かを提案する場面、相手に何かの問い合わせを

する場面、または、相手からの問い合わせに返答する場面などで使用されていることが分かった。これらの使用例(11)～(32)のすべてに共通しているのは、「～とか」の曖昧性を利用して物事を断定せずにはぼかして相手に伝えるということである。それは、たとえば、「聞き手が話者の提案を断りやすくするため」または「聞き手の選択の幅を広げるため」といった「聞き手への配慮」である。また、それは同時に発言によって生じる話者の責任を回避したり、相手から否定されたときに気まずい思いをしないようにするための「自己への配慮」であることもある。そのことがよく分かる使用例として、たとえば、次の(33)(34)がある。

(33) (友達との買い物でいい服を見つけたときに)「ねー、この服とかよくない？」(F,'91)

(34) (友人に最近おすすめのマンガを聞かれて)「○○○○○(マンガのタイトル)とかおもしろいよ！」(F,'93)

(33)では、「この服よくない？」と限定してしまうと、友達と服の趣味が合わないときに自分が否定された気がしてしまう。そのような嫌な気分を回避するために「～とか」が使用されている。(34)は、相手の好みのマンガが分からない状況での発話である。もし、あとで「おもしろくなかった」と言われると、それは話者の感性が否定されることになる。そのため、「～とか」を用いて、あらかじめ逃げ道が作られている。このような「～とか」の使用法は、一種の「自己防衛」と言って良いかも知れない。すなわち、それは話者自身による「自己への配慮」なのである。

以上、②ぼかし用法(“断定回避”)の使用場面と表現機能を考察した。この「～とか」は、表現を和らげる「ソフト化」(佐竹 1995)(佐竹 1997)と呼ばれる表現法の一つである。話者は「～とか」を使用することにより、表現を軟らかくして聞き手との対人関係に一定の距離を作り出すことができる。そこには「発話(言語行為)の設定する対人関係を緩衝する」という語用論的機能、すなわち、発話することによって生じる対人関係の軋轢を調節する緩衝機能が認められる(辻 1999a)(辻 1999c)。つまり、「～とか」はその曖昧性によって人間関係の衝突や摩擦のトラブルを避けて、コミュニケーションを円滑にする表現機能をもつのである。

3.2.2. 強調用法の「～とか」について

③強調用法(“強調提示”)の使用例は、話者が事態をプラス評価して強調する場合とマイナス評価して強調する場合の大きく2つに分類することができる。

話者が事態をプラス評価して強調する「～とか」の使用例として、たとえば、次の(35)～(44)がある。

(35) (誕生日に彼氏にサプライズをしてもらった友達に)「そんなサプライズしてくれるとか彼氏さんすごいね！」(F,'93)

- (36) (鍋パをするときに、その味付けは何がいいか聞かれて)「キムチ鍋とか食べたい！」(F,'96)
- (37) (憧れの神田さやかのライブに行ったことを友人に伝えるときに)「昨日ね、さやちゃんのライブとか行ったの、ホント最高だった！」(F,'92)
- (38) (ゲームの話題になり友達に)「俺は PS4 とか持ってるよ！」(M,'95)
- (39) (テニスで格上の相手に勝った友達に)「あの人に勝つとかすごいね！」(M,'92)
- (40) (電車で友達と会って、自分がその日寝坊したことを伝えようとして)「今日、朝寝坊したけど 5 分で家出たんだ。5 分とかすごくない？」(F,'92)
- (41) (突然休講になって休みができたとき友達に)「明日休みとかめっちゃうれしい。」(F,'91)
- (42) (仲が良い友人と話しているとき)「高校の時、インターハイも出場して、国立大学に受かるとかさすがだね。」(F,'93)
- (43) (深夜まで楽器の練習をするバンド仲間に対して)「こんな時間まで練習するとかすごいね。」(F,'94)
- (44) (バレーサークルでバレーの上手い子を見て)「バレーできるとかすごい！」(F,'94)

これら(35)～(44)は、話者が事態をプラス評価して強調する「～とか」の使用例である。たとえば、(35)では、誕生日に彼氏からすごいサプライズをしてもらった友達にそれがいかに凄いことなのかを強調して伝えるために「～とか」が使用されている。それは、「普通はそこまでできないよ」「とても大切にしてもらってるんだね」というような意味である。(36)では、鍋パーティー(鍋パ)をするときに一番食べたい話者の好物である「キムチ鍋」が強調されて提示されている。(37)では、ライブで憧れのタレントに会えたことが嬉しくて、そのことを強調して友人に共感を求めている。(38)では、話者がゲーム機の PS4 を持っていることが強調されている。それは、友人に対する自慢話にもなっている。このような場合、通常、「～とか」にはプラスの評価を表す「すごい」「食べたい」「最高」などの言葉が後接する。その他、(39)～(44)においても同様に説明することができる。そこでは「～とか」によって、話者がプラス評価する事態が強調されて提示されている。

他方、話者が事態をマイナス評価して強調する「～とか」の使用例として、たとえば、次の(45)～(54)がある。

- (45) (太る原因について友達と話し合っているときに友達に対して)「ポテトチップスにコーラとかありえないでしょ。」(F,'94)
- (46) (トマト嫌いの私がトマトを食べているとき友人に向かって)「トマトとかよく

食べれるね。」(F,'95)

- (47) (授業の課題の期限を知らされたとき友達に)「3 日でこの課題を終わらせるととかきついよね。」(M,'95)
- (48) (待ち合わせの時刻に友達が遅刻してきて、その友達に)「遅刻するとかありえないわー」(M,'95)
- (49) (宿題をやろうとした際、友達との会話で)「レポートとか面倒くさいよね。」(M,'94)
- (50) (テレビで流れている事件について母と話しているときに)「人を殺すとかほんとうにあり得ないよね。」(F,'95)
- (51) (自分が 12 時間睡眠してしまったことを友人に言うとき)「12 時間睡眠とかありえんよね。」(F,'93)
- (52) (友達と買い物中に)「こんな高い服とか絶対買えんよね。」(F,'94)
- (53) (休日に友達と)「夏休みもう終わるとか早いなあ。」(M,'95)
- (54) (次の日にテストが迫っているとき友達と)「明日テストとかほんとうしよう！」(M,'95)

これら(45)～(54)は、話者が事態をマイナス評価して強調する「～とか」の使用例である。たとえば、(45)では「ポテトチップスにジュース」が一番太る組み合わせだということを強調して、それがナンセンスであることを相手に伝えている。(46)では、トマト嫌いの話者が平気でトマトを食べる友人に驚いている。そのことが「～とか」によって強調されている。(47)では、残り3日で課題をやるが大変であることを強調するために「～とか」が使用されている。(48)では、待ち合わせの時間に遅れた友達の行為を強調して非難している。それは、「遅刻するなんて」という意味を表している。このような場合、通常、「～とか」にはマイナスの評価を表す「ありえない」「きつい」「面倒くさい」などの言葉が後接する。その他、(49)～(54)においても同様に説明することができる。ここでは「～とか」によって、話者がマイナス評価する事態が強調されて提示されている。

以上、③強調用法(“強調提示”)では、話者は事態をプラス評価またはマイナス評価して提示することが確認できた。この用法の「～とか」は、話者がある事態に対して驚いたり、賞賛したり、非難したり、羨ましく思ったりするような場面で使用されていることが分かる。すなわち、ここでは話者の強い気持ちが表現されている。使用例には、必ずしもプラス/マイナスのどちらの評価になるのか判然としない場合もある。しかし、ある事態に対して、驚いたり、賞賛したり、非難したり、羨ましく思ったりするときには、当然、そこには話者自身の何らかの評価が入る。このような「～とか」には、話者が判断するプラスまたはマイナス評価の事態を強調して、それに対する気持ちを表現するという表現機能を認めることができる。

3.3. 「～とか」の意味機能の拡張と使用の広がり

ここでは、「～とか」の意味機能の拡張(用法の広がり)と使用の広がり(実際の使用上の広がり)について述べる。まず、前者について論理的に考察する。次に、後者を用法別の使用率などの相違から分析する。その結果、①従来の用法(“一部例示”)、②ぼかし用法(“断定回避”)、そして③強調用法(“強調提示”)がどのような順番で拡大しているかについて推論する。

3.3.1. 「～とか」の意味機能の拡張について

天野(2001)によれば、②ぼかし用法(“断定回避”)と③強調用法(“強調提示”)の意味機能は、「～とか」の基本的意味である①従来の用法(“一部例示”)の拡張によって実現しているという。以下では、このことを具体的に例証してみたい。

①従来の用法(“一部例示”)の使用例として、たとえば、先にもあげた次の(55)がある。

(55) 「私は、ケーキとか和菓子とかの甘いものは、あまり好きではありません。」

(『日本語文型辞典』)

この(55)では、甘い食べ物が嫌いな話者が、その例として「ケーキ」と「和菓子」の2つをあげている。この場合、「甘い食べ物」という集合の要素のうち、「ケーキ」と「和菓子」がその一部として例示されているのである。すなわち、それが「～とか」の基本的意味の“一部例示”である。「ケーキ」と「和菓子」は、集合「甘い食べ物」を構成する要素であり、その他にも「チョコレート」「キャンディ」「アイスクリーム」など他の甘い食べ物の存在を暗示させる。つまり、①従来の用法(“一部例示”)には、ある集合の要素の一部を並列的に例示することにより、その集合全体を推定させる、または、他の要素の存在を暗示させる機能がある。

しかし、この使用例(55)では、必ずしも「ケーキ」と「和菓子」の2つの要素を提示しなくても良い。たとえば、次の(56)のように「ケーキ」が単独であっても、その表現機能は維持される。

(56) 「私は、ケーキとか甘いものは、あまり好きではありません。」

この(56)は集合の要素が単独で例示されているという意味で、これを仮に「～とか」の単独例示表現と呼ぶことにする。このような「～とか」の単独例示表現は、たとえば、次の②ぼかし用法(“断定回避”)の使用例(57)と形式的にまったく同一である。

(57) (母から夕食は何がよいか聞かれたとき)「シチューとかがいい。」(F,'93)

この(57)では、「シチューとか」と表現することにより、話者の食べたいものが「シチュー」に限定されることから回避されている。つまり、「シチュー」のような温かい食べ物、たとえば、他には「カレー」「ポトフ」または「ボルシチ」などの類似したものでも良いという意味である。そこでは、

「スープのような温かい食べ物」という集合全体が推定される、または、その要素である他の食べ物の存在が暗示されている。すなわち、この(57)においても、①従来の用法の“一部例示”という基本的意味が認められる。この(57)における①従来の用法と②ぼかし用法との相違は、**3.2.1.**で明らかにしたように、基本的には話者による「聞き手への配慮」(遠慮、気遣いなど)または「自己への配慮」(自己防衛)、および、使用場面における相違である。

さらに、とても興味深いことであるが、この(57)は③強調用法(“強調提示”)の使用例にもなりうる。その場合は、「シチュー」が他のメニューにも増してとても食べたくて、そのことが強調されている表現ということになる。「～とか」の単独例示表現であることは、③強調用法においても形式的には同一である。③強調用法であることの大きな特徴は、**3.2.2.**で示したように、想定される集合がプラス/マイナスの評価のきわだったものであるということである。この(57)が③強調用法の使用例である場合、「シチュー」は話者がとても食べたいというプラス評価をもつ食べ物から構成される集合の要素ということになる。以上のことから、③強調用法“強調提示”も①従来の用法の“一部例示”という基本的意味が拡張された意味機能をもつと考えることができる。

3.3.2. 「～とか」の使用の広がりについて

仮に①従来の用法の使用率が 98.0%であると想定する。アンケート調査では、実際には①従来の用法の使用率とその言い方に対する感じ方については調査してない。しかし、その使用率は、それが「～とか」の本来的な用法であるが故に、②ぼかし用法と③強調用法よりも高いことが容易に推測できる。先に **3.1.**において、②ぼかし用法と③強調用法の使用とその言い方に対する感じ方についての分析を行った。その際、「～とか」の使用率などを示した表(10)に①従来の用法の使用率 98.0%(仮)を追加して示すと、次の表(58)のようになる。

(58) 「～とか」の使用率などの相違 (n=342) (%)

	使用率	「気にならない」	「気になる」
①従来の用法	98.0(仮)	(未調査)	(未調査)
②ぼかし用法	85.1	94.1	3.8
③強調用法	64.3	86.2	8.5

この表(58)からは、各用法の使用率は①従来の用法 98.0%(仮)、②ぼかし用法 85.1%、③強調用法 64.3%であることが分かる。また、使用の有無にかかわらず、その用法が「気にならない」と考える人は②94.1%、③86.2%、そして、その用法が「気になる」と考える人は②3.8%、③8.5%である。あるとき、ある表現において、その「従来の用法」とは別の「新しい用法」が生まれたとする。そして、その「新しい用法」がまだ広く一般に普及していない段階のことを考えてみよう。当然、「新しい用法」の使用率および「気にならない」の数値は、「従来の用法」よりも小さくなる。逆に「気になる」の数値は「従来の用法」の数値より「新しい用法」の方が大きくなると考えら

れる。また、砂川(2000)では、「～とか」は並立表現(=①従来の用法)が並立の意味を徐々に失い、曖昧性を帯びることによって、暗示・曖昧表現(=②ぼかし用法)へと文法化のプロセスが進んだことが示されている。これらのこと、および、表(58)の数値の相違から、用法①②③の使用の広がり、①従来の用法→②ぼかし用法→③強調用法の順番であると考えられる。

以上、「～とか」の意味機能の拡張と使用の広がりについて考察した。その結果、「～とか」は①従来の用法(“一部例示”)、②ぼかし用法(“断定回避”)、そして、③強調用法(“強調提示”)の順番で、つまり、①→②→③のように拡大してきていると推論することができる。

4. 結論

以上、本稿では若者言葉「～とか」の①従来の用法(“一部例示”)、②ぼかし用法(“断定回避”)、および、③強調用法(“強調提示”)について、次の(イ)(ロ)(ハ)の3つの問題を考察した。その際、①は本来的な用法であるため、特に②と③の2つの用法を中心に分析を行った。

- (イ) 「～とか」の使用と言い方に対する感じ方
- (ロ) 「～とか」の使用場面と表現機能
- (ハ) 「～とか」の意味機能の拡張と使用の広がり

問題(イ)については、②ぼかし用法(“断定回避”)と③強調用法(“強調提示”)の各用法には 3.1.の分析で表(10)に示したような使用率と言い方に対する感じ方に相違があることが明らかになった。また、3.3.2.では、そのことから「～とか」の使用の広がりについて一定の推測をすることができた。

問題(ロ)については、3.2.において②ぼかし用法(“断定回避”)と③強調用法(“強調提示”)の各用法別に、それぞれの代表的な使用場面と表現機能を明らかにした。②の代表的な使用場面は、相手に何かを提案したり、何かの問い合わせを行ったり、または、相手からの問い合わせに返答する場面などである。そこには、話者による「聞き手への配慮」または「自己への配慮」があり、発話することによって生じる対人関係の軋轢を調節する表現機能が認められる。③の代表的な使用場面は、話者がある事態に対して驚いたり、賞賛したり、非難したり、羨ましく思ったりするような場面である。それには、話者がプラスまたはマイナス評価した事態を強調して、その気持ちを表現するという表現機能が認められる。

問題(ハ)については、3.3.において分析を行った。まず、「～とか」の意味機能は基本的意味①“一部例示”から②“断定回避”へ、そして、さらに③“強調提示”へと拡張されていることを論理的に示した。次に、「～とか」の使用の広がりについては、問題(イ)の考察の結果から、①従来の用法→②ぼかし用法→③強調用法のように広がっていることを明らかにした。これらのことから、若者言葉「～とか」は①従来の用法(“一部例示”)から②ぼかし用法(“断定回避”)へ、そして、さらに③強調用法(“強調提示”)へと、すなわち、①→②→③の順番で拡大してきている

と推論することができた。

これまで若者言葉「～とか」の強調用法については、あまり言及されてこなかった。本稿では、それに着目して、他の用法と共に「～とか」の意味機能の拡張と使用の広がりなどについて論考した。今後とも、「～とか」の強調用法の使用の広がりには注目したいと思う。

※本稿は、奥村佳奈が岐阜大学地域科学部に提出した平成 26 年度卒業論文「若者たちが使う「～とか」という表現について」(2015)をもとに、アンケート調査を拡大させると共に問題提起を改め、また新たな知見を加えて、さらに論考を深めたものである。

註

*1) 「ぼかし言葉」は、物事を断定しない曖昧な言い方をする一連の表現である。それは「断定を避け言葉尻を濁したり、自分の意志を譲歩形の言葉で述べたりすることによって、自分の意見が相手にストレートにぶつかることを避ける」(中山 1989:14)ための表現である。「ぼかし言葉」には、「発話(言語行為)の設定する対人関係を緩衝する」という語用論的機能、すなわち、発話することによって生じる対人関係の軋轢を調節する緩衝機能がある(辻 1999a)(辻 1999c)。『平成 16 年度国語に関する世論調査』(文化庁文化庁国語課 2005)によれば、近年、若年層では「ぼかし言葉」の使用は増加傾向にある。そこには現代の若者たち特有の心理が見て取れる。佐竹(1995)(1997)によれば、若者たちは自分の発言の正当性や妥当性に対する不安、聞き手の考えと異なることへの恐れ、また、そのことによって仲間から浮いてしまうことへの恐れを持っているという。さらには、聞き手からそれらのことを指摘されるのも恐いのだという。つまり、若者たちの「ぼかし言葉」の使用は、そうした不安や恐れに対処するための言語的戦略と考えられる。佐竹(1995)(1997)では、「ぼかし言葉」などの表現法を「ソフト化」と呼んでいる。

*2) 「ぼかし言葉」の「～とか」、すなわち、その“断定回避”の「～とか」は、「ぼかす言い方」「自信のない言い方」の一つとして、文化庁の「国語に関する世論調査」において、これまで平成 11 年度と平成 16 年度の2回調査が行われている。その調査からは、“断定回避”の「～とか」は、他の世代に比べて若者たちが多用する表現であることが分かっている。劉(2011)では、ぼかし表現「～とか」の使用実態と意味機能が明らかにされ、それが多用される日本の文化的要因についても論じられている。また、若者たちの対人関係における心理と語用論的な観点から考察が行われた辻(1996)(1998)(1999a)(1999b)(1999c)などの研究もある。

*3) 天野(2001)では、「～とか」の“強調提示”の他の使用例として、「ラーメンとか食っちゃってんだよ」(20 代女性の発話)が示されている。これは、普通、女性が行かないような中華料理店で一人でラーメンを食

べるという自分でも驚くような出来事があったことを友人に伝える場面での発話である。この例の「ラーメンとか」は、「餃子」「チャーハン」などの「ラーメン」以外の要素と並列させる“一部例示”の表現でもなければ、食べたのが「ラーメン」であることをぼかす“断定回避”でもない。この「～とか」は、「(普通、女性が一人では食べない)ラーメンなどというものを」「(こともあろうに他ならない)ラーメンを」のように「ラーメン」を“強調提示”している使用例である。

*4) この質問(7)の選択肢 1)～6)は、『平成 22 年度国語に関する世論調査』(文化庁文化庁国語課 2011)における「形容詞の語幹を使った言い方(「すごっ」等)について」の質問項目を参考にした。

参考文献

- 天野 みどり(2001) 「若者ことば—銅メダルとかとった」、和光大学総合文化研究所『東西南北』、pp.100-107
- 遠藤 織枝・谷部 弘子(1995) 「話しことばに特徴的な語の新しい用法と世代差—「すごい」「とか」「ぜんぜん」「けっこう」について」、現代日本語研究会『ことば』(16)、pp.114-127
- 奥村 佳奈(2015) 「若者たちが使う「～とか」という表現について」、平成 26 年度岐阜大学地域科学部卒業論文
- グループ・ジャマシイ(2000) 『日本語文型辞典』くろしお出版
- Kekidze Tatiana(2003) 「現代日本語における表現の「やわらげ」～「そうだ」、「げ」、「ぼい」などの場合～」、名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻『言葉と文化』(4)、pp.293-306
- 佐竹 秀雄(1995) 「若者ことばとレトリック」、『日本語学』14(11)明治書院、pp.53-60
- 佐竹 秀雄(1997) 「若者ことばと学校文法」、『日本語学』16(4)明治書院、pp.55-64
- 砂川 千穂(2000) 「日本語における「とか」の文法化について:並立助詞から引用マーカーへ」、日本女子大学大学院文学研究科紀要 6、pp.73-61
- 辻 大介(1996) 「若者におけるコミュニケーション様式変化—若者語のポストモダニティ」、『東京大学社会情報研究所紀要』51 号、pp.42-61
- 辻 大介(1998) 「ケータイと「とか」弁」、日本大学文理学部『学叢』62 号、pp.7-11
- 辻 大介(1999a) 「「とか」弁のコミュニケーション心理」、社会言語科学会『第3回社会言語科学会研究大会予稿集』、pp.19-24
- 辻 大介(1999b) 「若者のコミュニケーションの変容と新しいメディア」、橋元良明・船津衛〔編〕『子ども・青少年とコミュニケーション』、北樹出版

- 辻 大介(1999c) 「若者語と対人関係—大学生調査の結果から—」、『東京大学社会情報研究所紀要』(57)、pp.17-42
- 寺村 秀夫(1991) 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版
- 中俣 尚己(2008) 「日本語のとりたて助詞と並列助詞の接点:「も」と「とか」の用法を中心に」、大阪府立大学『言語文化学研究言語情報編』(3)、pp.153-176
- 中山 治(1989) 『「ぼかし」の心理—人見知り親和型文化と日本人—』創元社
- 文化庁文化部国語課(2001) 『平成 11 年度 国語に関する世論調査』大蔵省印刷局
- 文化庁文化部国語課(2006) 『平成 16 年度 国語に関する世論調査』国立印刷局
- 文化庁文化部国語課(2011) 『平成 22 年度 国語に関する世論調査』ぎょうせい
- 丸山 直子(1996) 「話しことばの助詞:「とか」「なんか」「なんて」(鳥居フミ子教授記念号)」、東京女子大学『日本文学』、pp.122-136
- 劉 曉傑(2011) 「ぼかし表現「とか」についての考察」、相愛大学人文科学研究所『愛大学人文科学研究所研究年報』(5)、pp.48-35